

あとがき

学生時代の昭和32年夏、土木学生実習で当時の建設省琵琶湖工事事務所で約1ヶ月を過ごした。旧洗堰を新洗堰に再建する設計図に鉄筋を書き入れていた。今はなき宇治川の大峰ダム（志津川ダム）、大峰発電所も健在であった。

平成21年12月、川部会の仲間と瀬田川、宇治川を歩いた。新洗堰も、もう50年稼働し続けている。喜撰山ダムや天ヶ瀬ダムもできた。古い井戸はまだ湧いていたり、枯れて石碑だけのものもあった。でも宇治橋の流れは今も絶えない。

この川歩きの要所で丁寧にご案内を頂いた国土交通省琵琶湖河川事務所の岩井敏男氏、関西電力(株)の小池章久氏、(株)ニュージェックの大槻英樹氏に感謝申し上げる。淀川水系も新たな段階に入ったようだ。

(社)日本水環境学会関西支部川部会／村岡 浩爾

参考文献

- ・池淵周一編著(2009)ダムと環境の科学 I「ダム下流生態系」, 285pp, 京都大学学術出版会, 京都。
- ・今井源衛(2004)紫式部, 「人物叢書」(日本歴史学会編集), 308pp, 吉川弘文館, 東京。
- ・江口知秀(2010)日本最古の石碑—宇治橋断碑, 建設業界, 59, 54。
- ・上林好之(1999)日本の川を甦らせた技師デ・レイケ, 350pp, 思考社, 東京。
- ・滋賀県情報統計課編集(2001): 地図, 滋賀県統計協会。
- ・滋賀県歴史散歩編集委員会編(2008)滋賀県の歴史散歩 上: 大津・湖南・甲賀, 「歴史散歩25」, 254pp, 山川出版社, 東京。
- ・鈴木康久, 西野由紀編(2007)京都宇治川探訪—絵図でよみとく文化と景観, 142pp, 人文書院, 京都。
- ・竹内均編(1978)日本列島地学散歩—近畿・中国編, 「平凡社カラー新書84」, 東京。
- ・土木学会編(1991)土木モニュメント見て歩き—全国105件の土木技術を訪ねて, 225pp, 技報堂, 東京。

写真資料

- ・国土交通省 近畿地方整備局
- ・関西電力株式会社
- ・高橋弘氏撮影 宇治歴史資料館
- ・石山寺

既刊の紹介

・みやびな川 編『白川』(2010)

〈企画編集〉(財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(社)日本水環境学会関西支部川部会

〈協力〉(社)近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～ 〈歴史とロマンの川 編〉

瀬田川・宇治川 (Setagawa・Ujigawa)

【発行】平成22年8月

【発行者】財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 (OMMビル13F)

TEL. 06 (6920) 3035 FAX. 06 (6920) 3036

〈ホームページ〉 <http://www.byq.or.jp>

©BYQ, 2010 Printed in Japan

「 飲める水 遊べる水辺 次世代に 」

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる ～ちょっと大人の散策ブック～

歴史とロマンの川 編

瀬田川・宇治川

(Setagawa・Ujigawa)

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(社)日本水環境学会関西支部川部会



「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構と(社)日本水環境学会関西支部川部会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、それぞれ5、6リーフレットからなる、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、本リーフレットでは、「歴史とロマンの川」編として「瀬田川・宇治川」を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

1 瀬田川・宇治川の概要



琵琶湖から流れ出る瀬田川
(最下流：瀬田の唐橋)

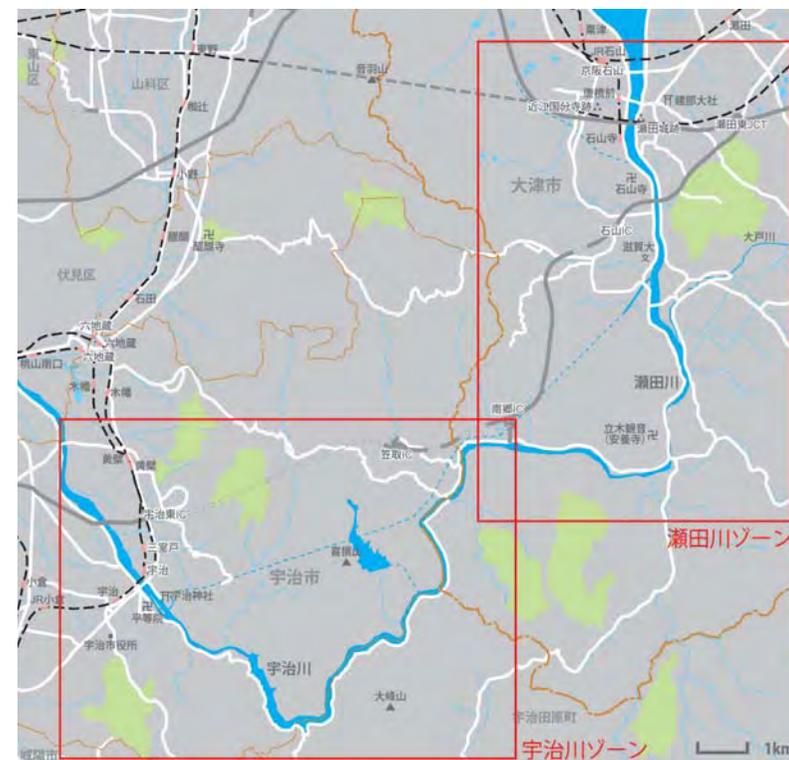
瀬田川は琵琶湖の湖尻から流れ出る唯一の自然河川である。滋賀県から京都府になるところで名前を宇治川と変える。ここまで約16km、そこから宇治市の中心に架かる宇治橋までが約9km、さらにそこから約15kmの地点で左からの木津川、右からの桂川と合流し淀川となり、大阪湾に注ぐ。この流路が淀川水系の本流であり、全長75.1kmある。淀川水系は近畿地方で最も重要な1級水系で、下流京阪神1,400万人の水源地である琵琶湖の水は、ほとんど瀬田川、宇治川を通じて流送される。

琵琶湖国立公園の範囲はこの瀬田川沿いに宇治橋まで伸びている。数々の景勝や歴史とロマンを秘めた川筋であるだけでなく、この川は明治時代から琵琶湖の水を制御する重要な河川構造物、宇治発電所に始まる電力開発の先端を行く近代技術の見せ場でもあった。早速、探訪の一步を踏み出してみよう。

目次

ねらい・目次	01
瀬田川・宇治川の概要	02
瀬田川の唐橋から石山寺へ	03
コラム1 紫式部と石山寺	05
瀬田川洗堰から宇治川へ	06
コラム2 デ・レーケと田上山植林	08
宇治川上流—水力発電の楽	09
コラム3 ダム湖にまつわる実話物語	10
コラム4 瀬田川・天ヶ瀬ダム(鳳凰湖)の水質	11
宇治の水めぐり	12

CONTENTS



瀬田川・宇治川流域図

(表紙写真/紫式部も見た瀬田川と琵琶湖の遠景(石山寺より))

2 瀬田の唐橋から石山寺へ

探訪の出発点はやはり瀬田の唐橋であろう。琵琶湖を間近に控え、瀬田川を東西に結ぶ橋は古くはこれ一本であった。壬申の乱の戦場ともなったし、京の都の防衛上、「唐橋を制するものは天下を制す」とも言われた。それだけに歴史上交通と戦略上の要衝であった。戦国時代には信長も秀吉も家康も、その軍勢は何度も渡ったことであろう。

橋そのものは、琵琶湖の水を流す拠点でもあるので時として洪水に耐られず、何度も架け換えられている。古い図会に残る姿や色を、今の橋に重ねて眺めるのも一興である。



瀬田の唐橋



瀬田の唐橋 説明板



量水機
(瀬田川水位観測記録計)



瀬田城跡

また近江八景の一つ「瀬田の夕照」としても有名である。この辺りは、大学や企業の艇庫が集中しボート競技が開催される場所である。いつ行っても練習中のボートが静かに往来している。

橋の西詰めに日本最初の自記水位計がある鳥居川水位観測所がある。明治33年設置以来、1日の欠測もなく、現在は他の湖岸5箇所の水位観測所と共に琵琶湖の水位を観測している。



建部大社



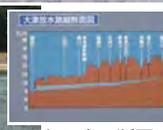
建部大社の「船幸祭」



大津放水路計画図



大津放水路放水口
(月見橋、この付近一帯が蛸谷貝塚)



トンネル断面



石山貝塚の碑(石山観光案内所の近く。
どこを掘ってもセタシジミが出てくるという)



石山寺観光案内所



石山寺東大門(重要文化財)



石山寺境内のくぐり岩



石山寺硅灰石
(右上は多宝塔)



硅灰石の上に建つ
石山寺本堂(国宝)

瀬田の唐橋のすぐ下流左岸に瀬田城跡があり、その近くに建部(たけべ)大社がある。建部大社は源頼朝が伊豆国に流される道中に立ち寄り源氏の再興を祈願し、後に成就したことから出世開運の神として有名になった。毎年8月17日には大神輿を船に乗せ瀬田川を下る「船幸祭」が行われる。

また近江国分寺跡、瀬田廃寺跡などこの辺りは多くの名所旧跡があるが、右岸422号道路沿いに蛸谷貝塚を過ぎると、右手に口を開いたコンクリート施設が見える。これは大津市内の小河川を地下で結んで洪水を軽減する大津放水路が伽藍山を貫いて出てきている。

少し歩くと、石山貝塚の手前に石山寺がある。この貝塚については石山寺境内にある石山観光協会に資料がある。

石山寺は東寺真言宗、如意輪観音を本尊とし、聖武天皇の命で良弁(ろうべん)僧正が747年に創建した。その後は京都の清水寺、奈良の長谷寺と並ぶ霊場として、また西国三十三箇所13番札所ともなった。近江八景の一つ「石山秋月」としても有名で、紫式部[コラム1]がここに参籠して「源氏物語」の着想を得たと言われる。

石山寺は、そもそも石山寺硅灰石(天然記念物)と呼ばれる珍しい岩が顔を出しているところに建造された。多くの霊場がそうであるように、天然の奇岩が乱れ配するのが地学上の特徴で、それが寺の名の由来にもなっているようだ。山門(東大門)を通り進むと、先ずこの奇岩の「くぐり岩」がある。さらに階段を昇ると巨大な硅灰岩が大きく波を打つ庭に出る。左上の本堂(国宝)、右上の多宝塔(重要文化財)はこれを基盤に建っていると見られる。多宝塔から少し歩くと、眼下の瀬田川の眺めは絶景である。

その横に**月見亭**が張り出すように建ち、紫式部や当時の多くの文学女房はここからの月を愛でたことであろう。境内を一通り巡ってくと、**関伽井屋**という小さなお堂があって、その岩陰から水が湧いている。その湧水を湛えた池は、青葉に紅葉に、四季折々の色かげを写す。

門前の通りには名物、しじみ釜めしの店が並ぶ。お昼ご飯にとてもよい。この辺りの瀬田川は、昔から琵琶湖特産セタシジミの産地であり、8000年前の近くの貝塚で見られるのは大型のセタシジミの殻が主体である。しじみにはマシジミ、ヤマトシジミ、セタシジミがあるが、琵琶湖の淡水に棲むセタシジミは、真水の川に棲むマシジミより汽水域に棲むヤマトシジミに似ているという。しじみの他に琵琶湖には鮒ずし、小あゆの佃煮、鴨なべ、近江牛など、美味しい特有の名物が多い。



源氏の間 (石山寺本堂)



石山寺多宝塔 (重要文化財)



石山寺月見亭



石山寺関伽井屋



左：マシジミ・右：セタシジミ (滋賀県立琵琶湖博物館提供)



宇治発電所石山制水門



シマトピケラ属幼虫とオオシマトピケラ成虫 (大阪府立大学大学院 谷田一三教授提供)



大日山と黒津八島



右下に見えるのが大日山



新旧洗堰 (手前：旧洗堰)



旧南郷洗堰の一部



瀬田川洗堰 (右側：パイパス水路)

3 瀬田川洗堰から宇治川へ

石山寺から瀬田川洗堰に向かう途中、**石山制水門**がある。ここから下流の宇治市にある**宇治発電所**へ直線距離にして約11kmの水路で導水される。その9割がトンネルで、1913年に完成して以来、毎秒最大60m³の水量で32,500kWの電力を産み続け、当時の関西の産業界を支えてきた。制水門からしばらく続く水路沿いは桜の名所である。しかしこの辺りの水路の壁面にはトンネルの内部に至るまで、季節には**トピケラ**の幼虫の巣が張り付き、そのために流れの抵抗が増えて流量が落ちるといふ。その時期には壁面の掃除をするというのは面白い。

対岸からは**大日山**がせり出している。昔、この辺りは大戸川からの土砂堆積による八つの島が形成され「黒津八島」と呼ばれた。この浅瀬の狭窄部は軍事上重要拠点のため浚渫が許されず、上流および琵琶湖沿岸はいつも水害に悩まされていた。そのため沿湖民はシジミ採りにことよせて川底を掘る「川浚え」を行ったと言われている。

瀬田川洗堰は(洗堰:通常時堰の上から水を流すタイプのものをいう)は土地の名前で**南郷洗堰**とも言う。琵琶湖の水位1cm分の水量は、実に約670万m³、これは中小規模のダム1基分の貯水量に相当する。従って琵琶湖の水位をここで制御することは治水、利水の両面で重要なことで、まさに近畿の水の安全・安心を握っている拠点である。1905年、レンガと石で築かれた初代洗堰は32門の通水門を持ち、それ以前の毎秒50m³から200m³に、さらに河川改修を行って400m³に流下能力を高めた。

コラム ①

紫式部と石山寺

紫式部は970年、藤原為時の娘として生まれ、29歳で17歳年上の藤原宣孝と結婚した。一女をもうけたがわずか3年で夫を疫病で失う。式部は文芸をたしなむ多感な娘時代を送り、歌を詠み多少の習筆もあったと見られるが、源氏物語は宣孝の死後まもなく取りかかったと見られる。それは内裏から何か珍しい物語をと注文を受け、1004年石山寺に参籠し川面に浮かぶ十五夜の月影をみて「須磨の巻」から筆を起こしたというものである。

平安時代には都から多くの官女がここに詣でる慣わしがあったようで、紫式部のほかに清少納言の枕草子、藤原

道綱母の蜻蛉日記、和泉式部の更級日記に石山寺のことが記されている。都からひと山を越えると近江の海、瀬田の流れを背景に花、紅葉が楽しめる流行の名刹であったであろう。上村松園筆の月を観る「紫式部図」は何と優雅なことが。



紫式部銅像 (石山寺境内)

現在の洗堰は1961年に新造され、10門のゲートによって毎秒800m³の水を流すことができる。これによって琵琶湖沿岸の浸水被害を防ぐと共に、水門を操作することによって湖水の貯留を制御することもできる。また、琵琶湖総合開発の一環で精度よく、確実に下流への補給水を流すための**バイパス水路**が併設された。また、すぐ近くには魚と遊べる**南郷水産センター**がある。

旧洗堰は土木の重要な遺構として一部を左岸側に残している。また当時の工事事務所の看守場も保存されている。すぐ近くに水のめぐみ館「**アクア琵琶**」があって、琵琶湖や瀬田川周辺の水文化や災害、あるいは自然環境を楽しく学ぶことができる。そこには旧洗堰の実物大の模型もあり、当時の**角落とし堰**(人力で木の角材を1本ずつ落として水を堰き止める方法)が迫力一杯に再現されている。この操作時間は全閉に48時間、全開に24時間かかったと言うが、今は電動堰となり操作指令が出たら全閉、全開とも上下流の安全を確認しながら、約6時間程度で操作が可能となった。

瀬田川洗堰のすぐ下流、左岸側より**大戸川**が合流する。大戸川流域もかつては美林であったが、田上山周辺から建材に燃料にと乱伐され、明治時代にはその改修事業にオランダ人技師デ・レーケ[コラム2]の指導を得て近代砂防が進められることになった。

さて、大戸川の合流点を過ぎ、関津あたりになると兩岸の山が迫り**瀬田の峡谷**に入る。ここはカヌーの名所、川幅が一気に狭まり流れが岩肌を嘯む。やがて**立木観音(安養寺)**の看板が目に入り、すぐに**鹿跳**(ししとび)に至る。



アクア琵琶 (洗堰の左岸にある資料館)



アクア琵琶内の旧洗堰実物模型



南郷水産センター



立木観音



立木観音の登り口



瀬田の渓谷



鹿跳の巖穴



富川磨崖石仏



長石鉱山の風景

ここには花崗岩が流水によって削られた奇岩罅穴(米かし岩)がある。

鹿跳の名は弘法大師が急流を渡れないでいると白い鹿が現れ、大師を背に乗せて岩を渡り跳んで霊木に導いたということからきている。右岸側に建立したのが立木観音、しかしその境内に行くには670段の石段を登りきらないと行けない。その苦勞が報われるのか毎月17日の月参りやお正月には参拝客で賑わう。鹿跳橋を渡って約3kmの所に、高さ40mを越える大岩壁に阿弥陀三尊と不動明王が彫られた**富川磨崖石仏**がある。

鹿跳橋より下流へしばらく行くと右に折れる上り坂の一般道があり、そこを2kmほど入ると**長石鉱山**がある。この長石は陶器の釉薬(うわぐすり)として良質であり、近郊の信楽焼でも使われている。それに岩間山を後ろ盾に、花崗岩を浸透する水も良質で、ボトルウォーターとして売り出されている。瀬田川はやがて京都府に入り、ここで宇治川と名を変える。

コラム ② デ・レーケと田上山植林

オランダ人技師ヨハニス・デ・レーケは日本政府の要請で明治20年(1888年)から25年に渡ってわが国に滞在し、近代的な砂防・治水工法を指導している。淀川、木曾三川ほか、彼の手による河川・築港は非常に多く、日本では「砂防の父」といわれている。瀬田川の支川、大戸川の上流には彼の指導による田上山鎧ダムが残っており、ハイキングの対象となっている。また田上山の植林ではデ・レーケの工法による植林工が現在でも続けられている。

デ・レーケが日本を去るとき政府は勲二等瑞宝章を叙した。本国でも勲爵位を与え、彼は貴族に列せられた。彼が日本に来たのは、上級技師のエッシャーの部

下としてであるが、勤勉で日本の技師をよく指導したという実績はもちろんであるが、いわゆる中等技術教育出の彼は出世意欲が強かっただけに、この勲爵位を得て真に心が安まったと言われる。

なお、2000年の日蘭交流400周年で、国の招きで彼の孫が日本を訪れている。



オランダ堤



デ・レーケ

4 宇治川上流一水力発電の巢

曾東大橋を左岸に渡る所は、もう天ヶ瀬ダム
の湛水区間である。この貯水池は宇治平等院にちなんで**鳳凰湖**と名付けられている。そこから左岸道路を約2.5km下ると、対岸の湖面に放水口が見える。何の放水口かと地図を見ると、山深い**喜撰山**(標高416m)の懐に**喜撰山ダム**があり、そこからの放水口であるが、ダムはここからは見えない。「わが庵は都の辰巳しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」と百人一首に歌った六歌仙の一人、喜撰法師は、都から見て方角も合うし、この地名と関係があるのだろう。だが「無名抄(鴨長明)」によると、その庵は宇治市三室戸寺の奥に住みかの跡があり、喜撰洞という洞窟も山腹にあるという。

天ヶ瀬ダム(正面)
天ヶ瀬発電所(右)
旧志津川発電所(左)



喜撰山発電所の取放水口
(鳳凰湖とダム湖の間で取放水する)



天ヶ瀬ダム



天ヶ瀬発電所の発電機



水理実験所
(旧志津川発電所)のダム実験風景



志津川ダム(水没)

喜撰山ダム(堤高91m)は揚水式発電所の上池として建設され、下池の鳳凰湖との間の地下に**喜撰山発電所**があり、1970年から最大466,000kWの発電をする。わが国の発電の大半が火力、原子力に頼る現状にあって、夜間に上池に水を上げ、昼間に下池に水を落とす過程で発電をする大型の純揚水式発電は、関西ではここが第1号であり、上下の湖水を蓄電池として水の有効活用がなされている。なお、喜撰山ダム湖畔の管理地域には一般の人は立ち入ることができない。**天ヶ瀬ダム**(堤高73m)の完成は1964年であるが、この建設によって上流にあった**志津川ダム**(別名:大峰ダム、堤高35m、1924年竣工)とその直下にあった**大峰発電所**が水没した。[コラム3]

コラム ③ ダム湖にまつわる実話物語

天ヶ瀬ダムの湖底に沈んだ志津川ダムとその直下にあった大峰発電所は、大きな湧水で水位が極端に減ったときにだけ幽極の姿を現す。しかし志津川ダムの水を利用して志津川発電所はまだ生きているというミステリーな話である。生きているとは言え、その姿は蔦に覆われた古城のよう、中は発電機こそないが、ダムや河川の水利模型が並べられ、水理コンサルタントの手で最先端の発電水理実験が行われているというから不思議である。

ダムも何もなかった1911年、奇岩、激流、渓谷を観光の売り物に通船事業が開発された。後に宇治川発電所の完成で水量が減り、志津川ダムで貯水区間ができたが、「宇治川ライン」と称して宇治の方から乗船場まで観光トロッコが走るまでに人気上昇した。しかし天ヶ瀬ダムの完成と戦後

の観光志向の変革で、1976年ついに観光船事業は閉鎖された。

なお、「宇治川ライン」とは、地理学者志賀重昂(しげたか)が木曾川、犬山の渓谷美をヨーロッパのライン川のようにと称したことから「日本ライン」が1913年に生まれたが、これにちなんで名付けられたものである。現在は道路が完備し、大津から宇治までスピーディに川筋が楽しめる観光ラインになっている。



当時の観光列車(後志津川ダム)

また、志津川ダムからの導水による**志津川発電所**は天ヶ瀬ダムの下流にあるため、建物としては残ったが、発電機能は失われた。現在、旧導水路内は京都大学の地殻変動観測所として利用されている。天ヶ瀬ダムは、琵琶湖、瀬田川の洪水時に流れてくるとされる流量(計画高水流量)毎秒1,360m³をダムによって840m³に調節、更に下流の淀川本流の洪水時には160m³に抑える洪水調節と、発電(最大92,000kW)および水道用水供給の3つの機能を持つ多目的ダムである。天ヶ瀬ダムは都市近郊では珍しいアーチダムとして、また宇治の多くの文化財と合わせて観光スポットとして多くの人が訪れる名所である。

このように2つの近代ダムと発電所が建

設されたが、既述の宇治発電所は1世紀以上も悠然と機能を発揮し続けている。現在、3つの発電所で最大58万kWの発電が可能であり、ここは大都市近郊の水力発電の巣とも言うべき地域となっている。

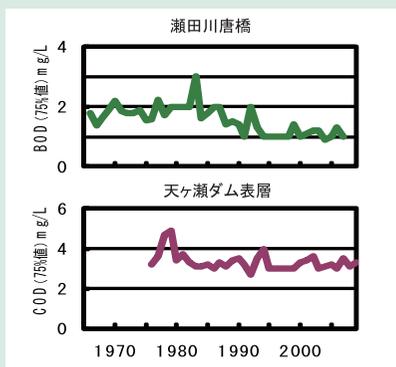
最近、あちこちの水域で動植物の外来種によって在来種の生息環境が脅かされている。琵琶湖のブラックバスやカナダモの繁殖はよく知られているが、ここ天ヶ瀬ダム下流にも優占種となっている外来生物がいる。それは**カワヒバリガイ**、**アメリカナミウズムシ**、**フロリダマミズヨコエビ**という底生動物であり、いずれも生息密度が高い。これらがはびこる原因にはダム湖で発生するプランクトンなどが考えられている。

コラム ④ 瀬田川・天ヶ瀬ダム(鳳凰湖)の水質

瀬田川の水質を代表する観測点は鳥居川水位観測所のある唐橋であろう。環境基準はA類型(生物化学的有機汚濁指標BOD:2mg/L以下)である。瀬田川の水質は琵琶湖からの流入水、下水処理場からの排水、各支川などに関係するが、河川の水は流れる過程で好気性の細菌による有機物の分解によってBOD値が下がる(河川自浄作用)。これが天ヶ瀬ダムに入ると水質の状況は一転する。すなわち、このダム湖では水が滞留し、水に含まれる窒素やリンなどの栄養塩と水温、太陽光などの条件下で植物プランクトンが発生するという、いわゆる富栄養化現象が起こる。従って水質は化学的有機汚濁指標CODで評価される。天ヶ瀬ダムにはCODの環境基準の規定はないが、およそCOD:3mg/L以下が望ましいであろう。

さて、唐橋のBODと天ヶ瀬ダム(鳳凰湖)のCODの経年変化を見てみよう。唐橋のBODは1980年代までは2.0mg/L前後で推移してい

るが、琵琶湖流域の洗剤規制などで瀬田川の水も改善され、最近10年はBOD:1.0mg/L前後と大変良好である。しかし、天ヶ瀬ダムの表層CODは最近でも3mg/Lを越えることもあり、富栄養化現象の制御の難しさを示している。更に夏場の低層湖水は貧酸素化してCODも高いと見られる。



源氏物語「宇治十帖」のイメージ像
(観流橋の下流側にある。奥に見えるのは朝霧橋)



天ヶ瀬吊り橋



亀石



宇治上神社



桐原水(宇治上神社内)



宇治神社



宇治神社にも桐原水。昔は宇治上神社から井水を受けていたが、今は別水源。

5 宇治の水めぐり

瀬田川を下って宇治に入るには、天ヶ瀬ダムの下流側を右に下り**白虹橋**を渡って右岸に行くのが面白い。この橋からダム本体の偉容を見上げ、その右に**天ヶ瀬発電所**、左に**旧・志津川発電所**を見ることができる。

白虹橋のすぐ下流には歩行者用の**天ヶ瀬吊り橋**がある。やがて右岸川岸にごつごつした岩の群が見られるが、その一つが**亀石**である。垂仁天皇が宇治の美女に会う助けをした亀と日本書紀にある。一方で、今後の治水計画によって水位変動が激しくなると、この亀は今まで以上に潜ったり甲羅干しをしたりする回数が増えるのではないだろうか。下流に向けて歩くと**観流橋**があって、橋の下を勢いよく大量の水が何とも言えない躍動感と共に宇治川に合流している。これこそ瀬田川から水路トンネルで送られてきた水である。この宇治発電所の建物はというと、木陰を通してその奥の方にかいま見られるだけである。建設当時は、発電所に落下する6条の水圧鉄管(ペンストック)が山肌に荒々しく張り付き、その偉業が力強く感じられたに違いない。しかし、そこに植林された樹木は今や山肌を覆い、発電所は見事な自然の風景のなかに潜んで存在している。

宇治の水めぐりとして最初に訪れるスポットは、**宇治上神社**(世界遺産)の境内にある**桐原水**である。その近くの**宇治神社**の境内にも同名の**桐原水**

がある。宇治には古七名水(**桐原水**、**阿弥陀水**、**浄土水**、**高浄水**、**公文水**、**百夜月**、**泉殿**)といわれる井戸があるとされるが、今日でもこんこんと湧いているのはここだけで、あとの井戸はあっても利用もなく枯れかかっているか、石碑が残っているだけに過ぎない。名水だけでなく、宇治はお茶どころ、古七名茶園や名陶、朝日焼き(朝日山の麓)というのもある。宇治は山に囲まれ溪谷がダムに注ぐ地形であるが、意外に滝の名所は少ない。

山間が開けてこの辺りの宇治川は川幅が広く、左岸寄りに中州が横たわっている。上流側が**塔の島**、下流側が**橘島**で、ほとんどつながっている。右岸からこの島に行くには**朝霧橋**を渡る。下流には有名な**宇治橋**が眺められる。最初の宇治橋は646年、僧、道登によって築かれたというが、その後戦乱や洪水の度に架け変えられた橋である。万葉集に宇治という地名は18首に出てくるが、宇治橋という名は出てこないという。

宇治橋は、瀬田の唐橋、山崎橋と並ぶいにしへの3大橋と言われ、橋の上流側に**三の間**という張り出し部分が現在の橋に再現されている。昔はここから水を汲み上げたようで、秀吉の茶会で使う水を汲んだという桶が橋の東詰め南にある**通園茶屋**に残っている。

さて、中州に渡ると橘島には**宇治川先陣の碑**があり、これは平家物語に語られる義経の家来が義仲軍を攻めるべく雪解けの川で先陣を争ったエピソードに因んでいる。塔の島にはわが国最大の石塔といわれる**十三重石塔**が魚霊の供養をしている。宇治橋に近い**橋寺放生院**にある**宇治橋断碑**とあわせ、これらは**宇治の3石塔碑**として名高い。中州と左岸との間は狭く、下流端に坊主堰堤があるため流れが緩やかである。その上流あたりで観られるのが宇治の名物、**鵜飼**である。中州を左岸に渡ると、もうそこは平等院を囲む街並みである。**平等院**(世界遺産)は、平安時代中期に隆盛を誇った太政大臣、藤原道長の別荘を、息子の頼通が1052年に寺院に改めたものである。当時の宇治は都びとの別荘地や避暑地であり、蜻蛉日記にも鵜飼いを楽しむ一文が見られ、紫式部が源氏物語の宇治十帖の舞台にしたことでも有名である。「源氏物語」を映像などで紹介する「**源氏物語ミュージアム**」は宇治橋右岸より約8分のところにある。



宇治橋の上流側



通園茶屋



橋寺放生院の山門



宇治橋西詰めにある紫式部像

断碑の堂（季節によって閉鎖される）



宇治中州下流の堰止め



中州、橘島にある宇治川戦陣の碑



鵜飼



源氏物語ミュージアム



三の間



平等院と阿字池



平等院不動堂内の井戸、名は不詳



縣(あがた)神社の井戸(縣井)



橋姫神社の入口に建つ「公文水」の碑



橋姫神社の社殿

もう一度、宇治橋に立って川を眺めよう。奥の山影辺りの上流には**鮎汲み場**があって、漁師が鮎掛けをし、その前を柴を運ぶ**柴船**が行き来していたという。宇治から淀にかけてこの両岸には覆い掛け茶園が続き、沿岸には灌漑用の独特の水車、**川瀬の水車**が大正時代まで並んでいた。今、橋の東詰めから見る西に沈む夕日は宇治川に波立つ流れを光らせている。この風景は昔と変わらないであろう。



夕暮れの宇治橋